若者たちが語り合うこれからの浪江町

未来を語る座談会

成人式を翌日に控えた2017年１月７日、災害の悲惨さや反省に加え、未来に向けての希望も伝え、後世や他の地域に語り継いでいく。これからを担う若者が浪江町の明るい未来を町長と共に語り合った。

町は震災と原発事故で、役場の移転、町民21,000人の方が町を追われて、自分の家に戻れないという、夢想だにしない事が起きました。事故から５年９ヶ月が過ぎ、現在は放射線の低いところから町を再生するべく、除染をはじめ、道路や上下水道などのインフラ復旧、商業施設や診療所などの生活環境整備が進められ、生活に必要最低限の条件が整いました。第二次復興計画の理念は、町を皆さんの世代に繋ぐふるさと再生です。バラバラになった町民の方々をどのようにサポートしていくか、町としてのアイデンティティを考えながら今後の町づくりをしています。

震災当時から今迄の事を振り返って

議長　町に対してどんな気持ちを持っているか？

山本　大堀に住んでいた頃の繋がりが自分の中では浪江というところなので、町のために何か出来ることに挑戦していきたいし、ワクワクする所だと思っています。

木村　役場職員として、町の復興にしっかりと携わっていきたいです。浪江には中学１年生までしかいなかったので曖昧な部分がありましたが、浪江60周年記念DVDを観て知らなかった部分がかなりあったので、これからしっかり知ることが出来たらと思っています。

岸本　震災当時は小学６年生だったので、町に対して深く考えず友達とワイワイ過ごしていました。今は浪江の人達と繋がりたいという思いがあります。

伊藤　昨年、沿岸部へ初めて立ち入りをした時は、公園や住宅が無く、自分の知っている浪江じゃないのを知ってショックを受けましたが、町のために何かやりたいと思いました。

ライフイベントと悔しかった想い出

木村　最初の頃は早く帰れる、（避難先での生活が）長引かないと思っていたので、長くなることが不安でした。ただ自分は陸上をやっていて、転校先の東和中学校は陸上が強かったので、自分の中では良い意味で変われたと思います。

伊藤　今までずっと浪江にいて転校の経験もなかったし、初めてこうして全然知らない土地に来て新しい友達と仲良くできるのか不安はありました。転校の理由を正直に話したら「原発事故なんだ、津波じゃなくてよかったね」って言われとても傷つきました。不安と孤独感と寂しさでいっぱいでした。

岸本　当時小６で、震災の翌日、サイレンが鳴る中逃げるのがすごく怖かった。その後、埼玉に家を借り、埼玉の中学に行く話もありましたが、いじめが怖くて、仲の良い友達と二本松の中学に行くことになり福島に戻りました。

議長　当時、大人はどういう風に見えた？

岸本　親もこれまで体験してない事じゃないですか。すごく混乱して、少しでも情報を取ろうと頑張っていた姿を覚えています。

山本　三号機が爆発すると聞いてから、ずっと重機を持って仕事に出掛けていた父の事が一番心配でした。

伊藤　初めは母の実家に居ましたが、父だけ南相馬市原町区に会社を立て直すことを決めて、バラバラの生活が始まりました。

馬場町長　当時はもう無我夢中で、色々な悩みや状況があったと思います。今までの苦労も、私が想像していた以上だと改めて感じました。

未来の浪江町をどんな町にしたいか

馬場町長　復興ビジョンに掲げた安心安全のまちづくりを実現していきたい。若い人が集まれるようなロケーション、町の背景を作っていきたい。例えばこれから鎮魂の地として復興祈念公園を国立として造ります。外から多くの人が入って来る、交流人口を増やせるような町を作っていけば必ず若い人たちが戻って来ることを信じています。

山本　女川の話ですが。女川の駅を降りると新しい商店街が出来ていて、もともと居た人達や移住した人達と先日話をする機会があり、何でそこに居るのかというのは、そこでのライフスタイルが自分たちに合っているからなんだと感じました。私たちの年代が求める物、上の年代の方達が求める物、その上の年代の方々が求める物が約20年スパンで違っていて、複数の物が一緒になって初めてライフスタイルとなり、ここで過ごしたいから戻ろう、住みたいと感じるのだと思いました。

議長　こういうものがあったら戻る。これがあるから戻れない。という考えはありますか？

岸本　普通に安心して生活できるものが揃っているのは勿論なのですが、放射線とか考えなくて良くなったら。

伊藤　安心安全は私も思います。津波がまた来ても大丈夫かとか。放射能もそうですが、まだ崩れたままの家や店があって、それが綺麗になるまでは戻りたいとは思えないです。

【参加者】

岸本　莉央さん（18歳）

出身地区：**権現堂地区**
被災時にいた場所：**小学校の教室**
現在の住まい：**福島市**

木村　郁也さん（19歳）

出身地区：**権現堂地区**
被災時にいた場所：**自宅**
現在の住まい：**二本松市**

伊藤　舞さん（19歳）

出身地区：**幾世橋地区**
被災時にいた場所：**自宅**
現在の住まい：**宮城県仙台市**

山本　幸輝さん（19歳）

出身地区：**末ノ森地区**
被災時にいた場所：**自宅**
現在の住まい：**福島市**

馬場町長　町は今、白紙のキャンバスの上に絵を描いている状態です。私たちは礎になるものを創ります。それに色を付けるのは皆さんだと思うのです。ライフスタイルに合った町を年代ごとに作って行かなければ、町は成り立たないと言うのはそのあとです。自然災害と、原発で出た避難者とは違うという感覚を持っての町おこしなのです。

議長　元に戻すという感覚はありますか？若しくは新しい町を創るという感覚でしょうか？

岸本　私の中では復興より復旧だという意識があります。小学生まで生活していた町に戻すのは大変だと思います。前よりも良くなったと思わせる町にならない限り人も戻っては来ないと思います。

議長　ロボット事業やエネルギー産業に対して関心がありますか？町として全体で構想している事業で、君たちは担い手になる世代だと思っているので聞きたいと思います。

馬場町長　ソフト面でのイノベーションを、若い、頭の柔らかい人がやっていけば、いい発想が出てくると思います。若い皆さんのような担い手が町を創り上げていくのが私の理想です。

山本　土台を創ると言ってくれる方々に非常に嬉しく有難い反面、そうじゃなくても良いのかなと思う。僕たちは基盤を創って欲しいと思ってなく、若い人たちにやって欲しい思いがあるなら、分業せずその基盤から若い子達と一緒に創って行くのが一番じゃないかと思います。

議長　女川では50歳以上、一切口を出さず若者に思い切って主導権を渡し、経験のある真の実力者のサポートのもと進めて形を創り上げました。意思決定者である世代の方々に対して尊敬度も高まったという事例があります。

議長　**浪江町のアイデンティティ**（帰属意識）って何だと思いますか？

木村　町の景観、津島は紅葉がきれいとか、町の中心地があり、**請戸は特に海を活用しイベントなどがあったのが浪江らしい**のかなぁと思いました。

伊藤　**「温かい街・優しい街・イベントが多い町」**親の関係でいろんな方達と交流があり、声を掛けてくれたり、孫のように接して頂き、季節ごとにイベントをやっていたのでそんな浪江が大好きでした。

岸本　**「優しさのある町」**今の生活と比べると近所付き合いが温かく優しかったし「お裾分け」も多くて優しさがあったのでそういう町だと思いました。

山本　「浪江らしい人」っていうのが自分の中では大

きいです。この人がいるから帰ろうとか、この人がいるからまた浪江で頑張りたいとかなのかなぁって思います。**優しく、いい意味でお節介な人が多いのが浪江町**だと思っています。

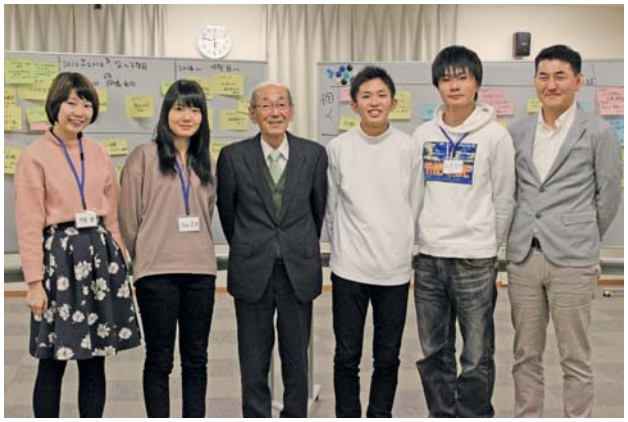
議長　町とどう関わっていくか？自分たちの役割は？

木村　役場職員として仕事を覚えることに精一杯ですが、相手の気持ちを考えて不安を取り除いていき、人口を戻せるような町の復興に関わっていけたらと思っています。

伊藤　浪江の良さを他の人に伝え、町の今を伝える。行きたいと思えるような**浪江町の良さを来たことがない人に伝えたい。**

岸本　自分の今やっている団体もありますし、**いろんな立場として浪江町をいつまでも支えたい**とそう思っています。

山本　同年代と一緒に何か出来る環境を創って行きたいと思うし、自分が何かをやれば誰かがついて来るんじゃないのかなと思います。自分が出来る環境を一生かけてやって行けたらと思う。

馬場町長　皆さんは今の浪江町をよく見ています。**「優しい・温かい町」私も人情含めて町の風景が大好きです。**町の生き残りをかけて一心不乱にやって行きます。

（企画協力）一般社団法人 Bridge for Fukushima